

「聖霊なる主イエスと偕に」

使徒言行録 1章 1～5節

使徒言行録は、聖書によって異なる名称が付いています。新共同訳聖書の「使徒言行録」以外に、口語訳聖書では「使徒行伝」、他の聖書では「聖霊行伝」とも呼ばれています。「使徒行伝」、「使徒言行録」を相応しいとする人たちは、イエス・キリストについて書かれている福音書とは異なり、ここには弟子たちの活動が前面に出て描かれているので、「使徒」という言葉を残したいと考えます。このような考え方は、今から約900年近く前からあったと言われます。その時は、「使徒たちの活動」という題がついていました。他方、その弟子たちを導き、働きへと遣わすのは、他でもない聖霊であるから、その聖霊の働きに光を当てて「聖霊行伝」という見方もあります。これも説得力のある説明で、確かに、使徒言行録の著者にとって、「聖霊」、「聖霊の働き」は大切であつたらしく、この1章でも最初から、「聖霊」という言葉が二度も続けて出ています。

「使徒言行録」を書いたのはルカという人です。1節は、「テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して・・・」となっていて、これ以前に、テオフィロという人に何かを書いて献呈したかのような書き方になっています。ルカによる福音書でも冒頭に、この福音書をテオフィロに献呈すると記されていますから、「使徒言行録」を書いた人物が、福音書を書いたルカであることにほぼ間違いはないはずです。

もし、今、ルカが生きていて、自分の書いたものが「使徒行伝」、「使徒言行録」、「聖霊行伝」と様々に呼ばれていることを知ったとします。そして、「どれが一番ふさわしい題でしょうか。」と質問されたとします。ルカはどう答えるでしょうか。物語風に想像してみます。

「私は、使徒たちの働きや活動を書きとめたが、それは、いかに初代のキリスト者たちが信仰深く、勇敢ですばらしかったかを書こうとしたのではない。聖霊という言葉も最初からたくさん使っているけれど、それを超自然的な奇跡や、魔術的な出来事を惹き起こす力として書こうとした訳ではない。確かに、使徒たちは勇敢ですばらしかった。殉教さえ厭わなかった。しかしそれは、生まれながらの人格や勇気などという、人間的な資質とはそんなに関係なかったのだよ。思い出してもらいなさい。主イエスが十字架にかけられた時、弟子たちはどうしていた？ 怖くなって、ひとり残らず逃げてしまった。犯罪人の仲間と思われるのは嫌だから、戸を閉ざして家にこもっていた。復活の朝、墓に赴いたのは女たちだけだったね。その弟子たちが使徒と呼ばれて、主のために殉教さえ厭わない者になっていく。強くなったのだ。なぜか。それはただ、活ける聖霊の故なのだ。復活のイエスに出会ったからなのだ。生前、主が言っていたことが、本当だったと確認したからだよ。そうした時に、主が生きておられることを悟ったのだ。そこから強くなったのだよ。あなたや私と同じように、人間的な

弱さと欠けはまだそのまま引きずっていたけれど、復活の主はその弟子たちを、前から導き、上から引き上げ、脇から支え、後ろから押し出して、ご自身と偕に生きる者として下さった。私の書いたものが色々な呼ばれ方をしているようだが、本当はどっちでもよいことだ。もっとも、「どちらが本当か」と言われれば、「どちらも本当だ」と答えるしかないがね。使徒言行録は、同時に、聖霊行伝でもあるのだよ。復活なさったイエス・キリストが聖霊として使徒たちと偕にあり、御心を行うために我々人間をお用いになる。その復活の主が、あなたたちにも臨んでいる。その事実を伝えたかっただけだ。なぜなら、私はその証人だからね。

今日の聖書箇所は次のような内容です。十字架にかかって死んだイエス・キリストが、生前の預言通り復活した。そのことを、数々の証拠によって使徒たちに示し、40日にわたって一緒に生活をした。その間、イエスが語ったことは、ただ神の国についてであった。そして最後に、「エルサレムを離れるな。前に私から聞いた、父の約束されたものを待て。」と、弟子たちに命じた、という内容です。

ここでイエスが、「前に私から聞いた」と言っていますので、ルカによる福音書を見ますと、24章49節で、復活したイエス・キリストが弟子たちに、「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所から力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」と語っています。「エルサレムを離れるな。前に私から聞いた、父の約束されたものを待て」を、原語のギリシャ語に沿って訳してみますと、このようになります。「エルサレムを離れず、待っておれ。私から聞いている父なる神の約束のために」。ここで使徒たちに求められているのは、漫然と受け身で「待っていなさい」ではありませんでした。原語では、「非常に、過度に」という語が頭について、「自分の方から熱心に待つ、しきりに待つ」という強い意味になっています。つまり、「心を凝らして、期待を持って、焦がれて待っているように」と言う意味が込められています。

「エルサレムにいなさい。期待しながら、しきりに焦がれて待っていなさい。遠くない将来に、前に約束したことが実現するゆえに」。これが、イエスの使徒たちに語った言葉でした。その「約束されたもの」は、「聖霊」と言うのです。ここで、「聖霊のバプテスマ」となっていますが、これは「聖霊を受けること」と言い換えることもできます。

のっけから、難しい問題につきあたります。ここでイエス・キリストは、「水によるバプテスマ」と「聖霊によるバプテスマ」を対比して語っています。実は、この対比は、使徒言行録の19章にも出てきます。異邦人伝道に出かけたパウロがエフェソで弟子たちに出会った時のことです。それによれば、パウロが内陸の地方を通過してエフェソに下つて来ると、何人かの弟子に会います。パウロは彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」と答えます。パウロが、「それなら、どんなバプテスマを受けたのですか」と重ねて尋ねると、「ヨハネのバプテスマです」と答えました。そこで、パウロは「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです」と言うと、人々はこれを聞いて主イエスの名によってバプテスマを受けたのでした。

(19・1-5)

バプテスマのヨハネは、ヨルダン川流域で悔い改めのバプテスマを宣べ伝えていました。ルカによる福音書によると、それは「罪の赦しを得させるため」のものでした。「悔い改めにふさわしい実を結べ。……よい実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げこまれる」。この激しい言葉を吐きながら、バプテスマのヨハネは、人々に悔い改めを迫り、こう続けます。

「わたしはあなたたちに水でバプテスマを授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちにバプテスマをお授けになる」(ルカ3・16)。

バプテスマのヨハネは自分の働きと役割をよく判っていました。自分は「水でバプテスマを授ける」ことを通して罪の悔い改めを迫るが、それ以上のこと、すなわち罪の根を断ち切り、死から命へ引き出して救いに至らせることはできない。その業を行う方、そういう意味で自分よりも優れた方が他におられて、その方は自分の後から来られる。その方の働きに比べれば私の働きなど無きに等しい。ほんとうの力、人間を救う力はその方にこそある。バプテスマのヨハネはそれを知っていました。ですから、ヨハネの目覚ましい働きを見て称賛した人々が、「ひょっとしたらあなたは、わたしたちが長い間待ち望んでいた救い主メシヤではないのですか」と尋ねても、はっきりと否定します。そして、救い主であるその方の働きを、自分の「水によるバプテスマ」と対比して、「聖霊と火によるバプテスマ」と表現しました。バプテスマのヨハネの後に来る「優れた方」とは、言うまでもなくイエス・キリストのことでした。

バプテスマは、日本語で「洗礼」と言うように、「水で洗う」儀式のことです。キリスト教はユダヤ教から枝分かれして誕生しましたが、そのユダヤ教には、「きよめ」という宗教儀式があつて、ユダヤ教徒たちはそれを大切にしました。神の民であるイスラエル民族にとって「清い」ということは決定的に重要なことでした。自分の「清さ」を保つためならば、同胞さえも見捨てるほどでした。その例がルカによる福音書にある「良きサマリヤ人」のたとえ話です。

それは、このような話です。エルサレムからエリコに下る道で、ある人が強盗に襲われました。強盗は「その人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った」と聖書は書いていますから、瀕死の状態だったのでしょう。「エルサレムから」とありますので、神殿から帰る途中のユダヤ教徒であったことと思います。そこに祭司が通りかかり、次にレビ人が通りかかります。両方ともユダヤ教社会では指導者格の宗教者で、レビ人は神殿で神事を執り行う家系にある人でした。しかし、二人とも瀕死の同胞に近寄らないばかりか、助けもしません。目に入ると、わざわざ遠回りをして避けて行ってしまいます。冷たい人間だからではありません。自分の宗教に従順であっただけです。ユダヤ教の教えでは、血に触ると汚れるとされていたからです。それほどまでに、あらゆる種類の汚れを避け、清くあることに励みました。

しかし、生身の人間ですから、理想どおりには行きません。それで汚れないために、様々なことが

考え出されました。その一つが、「水で洗う」という行為です。水は体の汚れを落として清めますが、旧約聖書には、神殿に入る時、また神殿で神事を行う時、つまり、神の前に出る時には水で身を清めることが定められています。神は清い方であり、けがれを嫌うと信じられていましたから、汚れたままで神の前に出ると、死をもたらすと考えられました。出エジプト記30章20節以下にも、「臨在の幕屋に入る際に、水で洗い清める。死を招くことのないためである。……これは、……代々にわたって守るべき不変の定めである」と記されています。良きサマリヤ人のたとえ話に登場する祭司も、レビ人もこの教えをよく知っていて、それを忠実にまもったにすぎません。

ここから、魂のけがれである罪の清めの儀式にも、水が用いられるようになりました。水に体を浸し、洗うことで魂が新しく生まれ変わることをあらわすようになりました。これまでの自分の罪を悔い改め、洗い清められて新しく生きることを公にする時、清めの儀式が行われました。水そのものに魔術的で不思議な力があるとしているではありません。人間の魂の汚れを洗い清める神の力を、水の力にたとえたのでした。初代のキリスト者たちは、十字架で死なれ、復活したイエスを救い主として仰ぎ、そのイエスに自分自身を結び付けて、イエスの教えを生きることになりました。主イエスと偕に生きてゆくという、この新しい人生の始まりを水による洗礼を以って公にしました。

バプテスマのヨハネが宣べ伝えたのはこの罪の救いに向かう準備としての、悔い改めのバプテスマでした。ヨハネは自分の手によるバプテスマと対比して、イエス・キリストのバプテスマを「聖霊と火によるバプテスマ」と言っています。ここで、注意をしなければならないのは、「聖霊によるバプテスマ」、「聖霊を受ける」ということを、異言を語ることや、癒しを行うことと、直接に結びつけないようするということです。「聖霊による」ということを、このような奇跡と結びつけて理解する時、いくつかのことが起ります。その一つは、「神が見えない。神を感じない。神が自分の傍にいないことを実感できない」と不安になり、それに耐えられなくなって、心の平安を求めて自分で確認できる何かを必死に求めてしまうそれです。

「自分の五感に訴えないものを信頼すること」ほど、私たちが不得手とすることはありません。それは私たちを「偶像」を持つことへと誘います。イスラエルの民がそうでした。出エジプト記に次のような話があります。モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民たちが、神の言葉を聞くためにシナイ山に籠ったモーセがなかなか下りてこないのを、置いてきぼりをくったのではないかと不安になり、自分たちのために金の子牛を造って神として崇め、神の怒りを引き起こしたという話です。自分の手の中に神をもっていなければ不安でしかたがない。まるで自分のポケットの中に入れ、必要な時にはいつでも取り出せるかのように、神を自分の手元においておかなければ心配。神が偕にいないことを実感して、安心したいからです。

このような欲求は、聖霊の働きを見極めたいとする時にも働きました。神が偕にいないということは、聖霊がここにあるということだ。であれば、どのようにして聖霊が人間の中にはいつてくるのか、その時には、どのようなしるしが現われるのかを具体的に知りたいと思うようになります。パウロの時代には「異言を語ること」がその代表格でした。異言を語ることがなければ、癒しを行うことがなければ、聖霊はその人に聖霊は臨んではいない。神が今・ここにいない。自分たちにアピールするよう

な、神が偕にいる「しるし」を目にすることができないからです。そこで、「水のバプテスマだけでは不十分。聖霊のバプテスマを」と言うわけです。この欲求は、多くの場合エスカレートし、人々の間で比較と裁きあいが始まります。つまり「しるしがないのは、聖霊が働いていないのだ。信仰がないのだ」と、まるで自分が神の代理人であるかのようにして、他人の信仰ばかりか、その人と神との関係をも裁き始めます。これは悲劇です。傷と痛みだけが残ります。これは「聖霊による」出来事とは程遠いことでしょう。

しかし、バプテスマのヨハネを始め、復活のイエスが言った「聖霊による」は、そのようなものではありませんでした。「聖霊によるバプテスマ」もまた、そのようなものに結び付けられてはいませんでした。バプテスマのヨハネは確かに、「悔い改めにふさわしい実を結べ。……よい実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げこまれる」と言って、「水のバプテスマ」に神の「さばき」をこめました。しかし、その時の「さばき」とは、たとえそこに人間的な弱さと欠けがあり、罪があったとしても、その報いとして人を滅ぼすための「さばき」ではなく、その反対に、その人が再び神に結びついて、新しい人となるために不可欠な「さばき」のことです。

ルカは福音書に、「その方が聖霊と火でバプテスマをお授けになる」と書いていますが、その後に「そうして、その方は手に箒を持って、隅々まできれいにし、殻は焼き払われる」と続けています。イエス・キリストがわたしたちを真にさばかれる時、私たちが握り締めて後生大事にしている中味の残骸のようなもの、棄ててしまってもよいものをきれいになさるというのです。イエス・キリストのさばきには、すでにその中に、私たちに新しい命を吹き込む救いの恵みが伴っています。なぜならば、罪人をこそ招いて、救い出すこと、罪赦されたものとして恵みに包み込まれて生きることこそが、イエス・キリストの御心だからです。

5節でイエス・キリストが語っていることも同様です。使徒たちが約束された「聖霊を受ける」ことが、神の国との関連で語られます。「神の国」こそは、最初から最後まで、イエス・キリストの教えと働きの中心でした。イエスのご自分が「神の国の福音を告げ知らせる」ために、世にあることをはっきりとわかっておられ、人々にそう語り、教え、神の国に生きる者としての生き方の模範を示されました。復活の後も変わることなく、イエス・キリストの心を占めていたのは、かつてと同じ「神の国」の福音とそれを実現する御心でした。イエス・キリストによれば、神の国は貧しい人たちのものです。東から、西から、南から、北から、方々から実に様々な人々がやってきて、偕に暮らすのでした。神の国は、一目でわかって、「そこにある、ここにある」と指差せるような形では来ない。まるで蒔かれた種が知らないうちに芽を出し、葉を繁らせ、実を結ぶように、私たちの想像や計画を超えたところで、私たちが予期しないような形で神の国は来るのです。神は、私たちよりも大きな方で、人間の思いを越えて自由に働かれるからです。また神の国の門は、幼な子のように、駆け引きや人間的な計算から遠い無垢な心に開かれていて、物質的にも精神的にも「財産」と呼べる多くを持ち、それを失うまいとする人が入るのが難しい。神の支配が至るところに満ちているところ。イエスは、「神の国」をそう教えました。ですから、イエス・キリストは「神の国」は、神の御旨を求める人々の「中にある」と教えられたのです。

そのような神の国が、救いが、イスラエルの民だけにとどまらず、神が造られたすべての人々に開かれているという約束がイエス・キリストの復活から実現する。この喜ばしい天からの知らせに、自分自身を結びつけて生きてゆきなさい。イエス・キリストがそうであったように、人と共に、人を愛して生きてゆきなさい。「エルサレムを離れず、待っておれ。私から聞いている父なる神の約束のために」と、復活の主が使徒たちに言われたのはそういうことではなかったでしょうか。

神が私たちを見放していないという「しるし」を手にした私たちに、神を自分のポケットに入れて必要な時には取り出したいと願う私たちに、御言葉が語るのは、「あのイエス・キリストが復活なされた。聖霊として変わることなく、いかなる時にもあなたと偕におられる。これだけで充分!」。使徒言行録は、その主を見上げ、その主に信頼をおくこと、すなわち信仰を杖にして歩んだ人たちの歴史であり、記録だと言えます。最後に、八木重吉というキリスト者の詩人の詩を紹介して今日の説教を閉じます。

彼は云った

自分は再び此の世へ来る と

私は キリストより正直な者があるとは思えない

私は 彼が再び来ることを信ずる

再びキリストがくる

キリスト自身がそう云っている

キリストが嘘を云うはずがない

その時

私自らは完全に悪い人間だけれど

ただキリストを信じている故のみ

神のくにに入れてもらえると信ずる

〔祈り〕

神様、

何が知る価値のあるものか、それを見分ける心を、

愛する価値のあるものを愛する心を、

あなたがよしとされる価値を尊び

あなたが忌み嫌われるものを憎む思いをお与えください。

見たことだけで審くことなく、

聞いたことだけでそしることなく、

異なったものをそれぞれに見分けて

あなたが喜ばれることとは何かを見極め、
それを行えるようにしてください
十字架と復活の主、あなたの独り子イエス・キリストの御名で祈ります。
アーメン